

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00077

研究課題名（和文）スペイン神秘主義の影響作用史研究

研究課題名（英文）Reception History of Spanish Mysticism

研究代表者

鶴岡 賀雄（Tsuruoka, Yoshio）

清泉女子大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：60180056

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：十六・十七世紀のスペインで展開したスペイン神秘主義は、二十世紀になって新たに評価され、キリスト教、ひいては宗教の枠を越えて、現代の思想や芸術に大きな影響を与えた。本研究は、おもに二十世紀以降の研究者、思想家が、アビラのテレジア、十字架のヨハネら、スペイン神秘主義の代表者の著作をどう受容したかを解明し、それによって、この思想潮流がもつ現代的創造性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

キリスト教を国是としていた十六・十七世紀のスペインで展開したスペイン神秘主義は、当時のカトリック的世界観にもとづき、キリスト教の用語で語られた思想であり実践だが、二十世紀に入って高く評価されたときには、狭義のキリスト教の枠を越え、「宗教」の枠も越えて、人類にとって普遍的な意義のある思想として受容され、創造的読解の対象となった。そうした受容の諸相を解明することで、カトリシズムの世界観の中に囲い込まれていたこの思想潮流が潜在的に有している豊かな可能性を取り出し、伝統宗教が総じて力を失いつつあるいわゆる「ポスト宗教」的状况下で、新たに活用しうる人類の知的遺産として提示した。

研究成果の概要（英文）：The Spanish mysticism that developed in 16th and 17th century Spain was reevaluated in the 20th century and has greatly influenced modern thought and art, transcending the boundaries of Christianity and religion. This study investigates how researchers and thinkers from the 20th century onward received the works of representatives of Spanish mysticism, such as Teresa of Avila and John of the Cross. Based on this investigation, the study conducts a close reading of their texts to elucidate the contemporary creativity inherent in this intellectual movement.

研究分野：Religious Studies

キーワード：Mysticism Spain Christianity Modernity

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者(本研究は代表者の個人研究であるため、以下「私」と記すこともある)は、大学院以来、近世初期のキリスト教神秘思想潮流であるスペイン神秘主義、とくに十字架のヨハネやアビラのテレジアを研究活動の中心に据えてきたが、本科研費申請時点で東京大学大学院の教員としての定年間際であった。つまり本研究は私のライフワークである。したがって、スペイン神秘主義に関する知識、また研究資料については、相当の蓄積があった。

(2) スペイン神秘主義に対する私の研究の視点は、キリスト教の内部からこれを見るのではなく、現代日本の世俗的宗教研究者としてこの思潮を研究し、キリスト教の枠を越えてこの思潮が有する意義や価値を現代的な観点から解明しようとするものである。そのために私は、研究当初からさまざまな宗教理論や哲学思想、とくに現代的な問題関心に根ざした理論や思想を研究してきており、近世初期のキリスト教世界で生まれたある意味で特殊な神秘思想を、広い観点から読解するための方法論的基盤は相当程度確立していた。

2. 研究の目的

これまでの研究蓄積を踏まえ、まだ十分に扱えていなかった研究対象や研究領域の研究を深めて論文等にまとめ、それらに基づいてスペイン神秘主義の全体像を描き出し、さらにその現代的意義を明らかにする著作を完成させることが本研究の目的だった。研究自体は初期の目標を概ね達成する進展を見て、著作の主要部分は完成しているものの、著作を構成する論文の執筆等に想定以上を時間を要し、著作の刊行には到っていない。また、最も深く研究してきた十字架のヨハネについては、全体のバランス上、別に一書を執筆する必要性が明らかになった。ともに私のライフワークであるので、可能なかぎりの充実に努め、速成を期さずに執筆作業を継続したい。

3. 研究の方法

本研究はキリスト教神学に属するものではなく、宗教学、宗教思想研究である。スペイン神秘主義については、十九世紀までは、ほとんどが神学者、修道者による読解のみがなされてきた。しかし二十世紀の前半から、西欧社会において神秘主義全般についての関心が高まり、スペイン神秘主義についても、キリスト教神学者以外の多くの人の関心をよんだ。伝統的神学者たちと、世俗的な学者、思想家たちが、それぞれの視点からこの対象について多様な読解を提出した。こうした研究史的経緯を受けて、本研究では「影響作用史(Wirkungsgeschichte)」というガダマーの用語を研究題目に掲げた。これは、ガダマーの用法に厳密に即した意味ではなく、近世スペインの神秘家たちのテキストと、近現代の研究者や思想家たちによるその読解をいわば重ねて読むことで、研究者自身の創造的読解を試みることの意味である。そもそも過去の思想については、「客観的」な研究というものはありえず、過去及び現代の研究者たちによるこれまでの読解の蓄積と、現代の歴史的・文化的状況から自由でありえない研究者自身の視点を自覚的に引き受けつつ、新たな読解を提出したい、ということである。そうした研究態度の手本となっているのは、Michel de Certeau (1925-1986)の、*La fable mystique* (1981)を代表とする一連の神秘主義研究である。

4. 研究成果

(1) 上記の方法論に基づきつつ、スペイン神秘主義の主要人物についての個別研究を遂行し、以下の成果を得た。

アビラのテレジア(Teresa de Avila; 1515-1582)について、近年のフェミニズムの観点からの研究状況を踏まえた上で、神と魂の相互内在という彼女の神秘思想の核心について、十六世紀当時の修道思想書との差異を、その「語り方」の女性性に焦点を当てることで明らかにした。成果は国際シンポジウム(岡山大学)で発表し、英文で論文化した。("Seek Yourself in Me": Teresa of Avila's "Feminist" Mysticism", in Jean H. Miyamoto ed., *Contribution of Women to Con-viviality: In/Ad Spiritation to Convivials*, (『教父と相生』2)教友社, pp. 198-217, 2019年3月)

ルイス・デ・レオン(Luis de Leon; 1527-1591)についても、同じく近年のフェミニズム神学の観点からの研究を参考に、当時の最も学識ある神学者の一人であった彼の学的営為における、位相を相互に大きく異にする三つの「女性」観について解明した。すなわち、彼の雅歌註解書に見てとれる、婚姻神秘主義の伝統に掉さす「神の花嫁」として理想化された女性、世俗の家庭婦人が則るべきキリスト教的倫理を説く『家庭婦人の完徳』に示された、家庭を立派に切り盛りする有能な女性の理想、そして晩年のアビラのテレジアとの関わりから生まれた、男女の差異を超越した、ある意味では男性に勝る偉大な女性の発見、である。内容は、「ルイス・デ・レオンにとっての「女性」の諸相 - - 雅歌読解を中心に - -」(「キリスト教と女性」研究会(編)『西方キリスト教の女性：その霊的伝承と雅歌の伝統』(教父と相生 5)教友社、116 - 164頁、2023年3月)に発表した。

十字架のヨハネ(Juan de la Cruz; 1542-1591)については、最も充実した著作『靈の賛歌(Cántico Espiritual)』について集中的に研究し、自作恋愛詩とその自註からなるこの著作の構成自体に現れている彼の神秘階梯論の構造と性格を明らかにした論文(「身心変容のものがたりとしての『靈の讃歌』」, 2019年3月)、同書における神秘的合一の頂点を論じた箇所を詳細に検討しその含意と射程をとりだして見せた二本の論文(「原罪から栄光まで - 十字架のヨハネの原罪論の射程 - 」, 上智大学中世思想研究所編『「原罪論」で紡ぐキリスト教思想』知泉書館、2021年7月; 「愛の等しさ」 - 十字架のヨハネ「神人合一」論の要諦 - 」, 森本一夫他編『イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集』ナカニシヤ出版、173 - 196頁、2023年3月)、言語以前の神秘的体験と、そこから生まれる詩的言語や、通常理解を絶した逆説的言語、それをさらに知解可能なものに理論化する神秘思想言語、これらの位相差および相互関係について、現代的言語思想を参照しつつ解明した二本の論文(「十字架のヨハネの詩をどう読むか 上田閑照の「言葉」論を参照しつつ」『東西宗教』20、39 - 67頁、2022年10月; 「十字架のヨハネ『光と愛の言葉』: 翻訳と読解」, 2024年3月)を執筆した。他に、学術論文ではないが、十字架のヨハネがキリスト教会の外部で、近現代の思想家や芸術家にどのように受容されてきたか、逆に言えば、十字架のヨハネ等の神秘思想がどのようなインパクトを近現代の思想家や芸術家に与えてきたかを検討する記事を小さなキリスト教系の雑誌に連載している(「カルメルの外のカルメル - 教会の外から見られたアビラの聖テレジアと十字架の聖ヨハネ」、『カルメル 今日の靈性』(季刊))。これまで扱ったのは、柳宗悦、吉満義彦、井筒俊彦、大江健三郎、サルバドール・ダリ、ユイスマンス、ベルクソン、等だが、さらにジョルジュ・バタイユ、シモーヌ・ヴェイユ等を扱う準備ができています。この連載は、本科学研究の趣旨を最も具体的に実現しているものであり、研究を通じて、二十世紀の思想家、芸術家に対する十字架のヨハネの影響の予想以上の大きさが明らかになった。

近世初期のスペイン神秘主義には通例含まれないが、中世スペイン(カタロニア)の特異な神秘家ライムドゥス・ルルス(Raimundus Lullus; 1232-1315)の対イスラーム世界宣教について、初期の著作『異教徒と三賢者の書』を主題材に研究した。これも本研究の一翼を担う重要な意義をもつ。中世における宗教間対話の理論書と言える同書の背景には、後のスペイン神秘主義の基調となる神との熱烈な恋愛感情が流れており、名高い『愛する者と愛される者の対話』にそれは表現されている。「ルルスの術」と呼ばれる独自の論証法を含め、ルルスの神秘思想の全体像を視野にいれた研究成果を論文として発表した(「ライムドゥス・ルルスの冒険 中世キリスト教のイスラーム世界宣教 - 」佐野東生・久松英二編『キリスト教とイスラーム・対立から共生へ 神秘思想にみる聖人・悪魔観』晃洋書房、近刊)。

(2)「スペイン神秘主義」という把握について、西欧宗教史、宗教思想史全体の流れの中でこれを位置付ける作業を行い、以下の成果を得た。

「スペイン神秘主義」という言い方は十九世紀後半から用いられるようになったもので、「ドイツ神秘主義」などと同様、近代西欧社会の構築概念である。その背景には、概ね十九世紀の後半から二十世紀の前半にかけて、西欧社会において「神秘主義」という言葉が、キリスト教会内部でも、非教会的な宗教研究(宗教学)の分野でも、文学・美術・音楽といった芸術世界でも、政治思想の領域でも、また脱キリスト教的なさまざまな新宗教運動においても、多様な含意のもとに使われるようになったという事情がある。その理由は、次のように考えられる。

十九世紀半ば頃から、西欧世界においては、いわゆる世俗化の動向が歴然としたものとなり、政治、産業、教育といった社会の実質を担う部分でキリスト教会の影響力の後退がはっきりしたものとなる。学術・文化の領域でも、教会の規制や意向の掣肘を受けない活動が当然のこととなりつつあった。近世以降の西欧社会が進めてきた、思想、学術、芸術等の宗教(教会)からの分離・自立は、すでに確立された成果となっていた。こうした時代状況にあって、かつては教会が専らに管理してきた「宗教」の領域の問題を、教会の神学とは別の視点から考察し理論化する試みが新たに生まれてきた。哲学者は「神」の存在を前提としない哲学の視点から、歴史家は客観的実証史学の方法で、また当時誕生した社会学や心理学や人類学の研究者は、それぞれの学問の枠組みの中で、宗教について論じるようになった。芸術家たちも、宗教の領域のことがらを作品に自由に取り込むようになった。その際、キリスト教、また他の諸宗教にみられる、理論的教義の制約に縛られない思想や実践が、「神秘主義」の名の下に着目されるようになった。約言すれば、世俗的学知が「宗教の真理」を自分たちの学的言語で論じようとするとき、定義上教義神学の規矩を脱する神秘主義という領域が、非神学的観点から宗教を論じる経路として称揚されたのである。

その一方で、この時期にはキリスト教会側も、進行する近代化・世俗化への対応策をさまざまに模索していた。そのとき、元来キリスト教のいわば深奥に秘められていた古代以来の「神秘神学(theologia mystica)」の伝統、とりわけ、中世末から近世初期にかけて新たに神学の一分野として形成された近世的な神秘神学が、あらためて注目され、再評価されて、キリスト教の精髓を示すものとして前面に持ち出されることとなった。約言すれば、キリスト教会が、すでに堅固に構築されていた教義神学を拒絶する世俗化した知識人に対して、キリスト教の真理を魅力的に語り直す方途として、神秘神学の同義語である神秘主義を、新たな可能性の領域として開拓しようとした。

こうして、「宗教の真理」を神学とは別の仕方で捉えなおし評価しようとする世俗的諸学や芸

術と、世俗化しつつある社会の中で「キリスト教の真理」を新たな言葉で語り直そうとする教会神学者たちの志向が交錯する領域として、「神秘主義」が脚光を浴びるようになった、と解することができる。したがって、神秘主義という言葉には、用いる人ごとに異なった意図、学的背景、含意が込められていて、一定の共通理解に収斂することがない。むしろ、多方面からの新たな模索が共存し錯綜する、混沌たる希望の領域が「神秘主義」なのだった。そうした領域を形成する歴史的事象としての「スペイン神秘主義」は、「ドイツ神秘主義」などとともに、神学的読解も世俗的（非教会的）読解も可能な豊かなポテンシャルをもつ思潮として意義づけられていった。概ね以上のような見通しを得て、素描的なものであるが、短い雑誌論文（「神秘主義の系譜と可能性」『福音と世界 2020年1月号』、6-11頁、2020年1月）執筆と学会発表（「スペイン神秘主義の読まれ方 - 思想形成の資源としての詩と体験 - 」、日本宗教学会、2020年9月；『宗教研究別冊』94巻別冊、90-91頁、2021年3月）を行った。

(3)宗教思想史上にこのように位置づけられる「スペイン神秘主義」の研究から発して、「神秘主義」という領域全般について、より一般的、かつ現代的な観点から意義づける試みも、本研究の枠内で遂行した。具体的には以下である。

上記のように、「神秘主義」は、宗教の真理、とくにその核心をめぐる、キリスト教神学内部の視点からと、キリスト教の外の視点からの諸理論が交錯する領域であり、したがって、ここでは、キリスト教と他の諸宗教をなんらか共通する地平に並べて論ずる態度が自ずと導入される。いわゆる比較宗教、比較神秘主義という発想が、「神秘主義」概念には内含されている。このことを自覚的に引き受けて、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教を相互に関連させる独自の比較神秘主義的哲学を展開したライモン・パニカー（Raimon Panikkar; 1918-2010）に着目した。スペイン出身のパニカーの霊性は十字架のヨハネやアピラのテレジアに深く養われており、彼の哲学はスペイン神秘主義の遺産の現代的継承、展開と見ることもできる。日本では紹介されることが稀だが、世界的に名高いこの人物について、おそらく日本で初めてのモノグラフ的研究論文を執筆した（「宗教」を越える - - ライモン・パニカーの試行 - - 』、2020年12月）。また、とくにその比較神秘主義的意義に焦点を据えた講演を、パニカーの故郷でパニカー文庫を所蔵しているジローナ大学において行った（"How and Why I am interested in Raimon Panikkar": El neoplatonisme i la mística cristiana: Una lectura des del Japó, Lectures Fons Raimon Panikkar, Universitat de Girona, 2024年2月）。現地の日本宗教研究者たちとの交流によって、今後の比較神秘主義的研究の足掛かりをつくることもできた。

厳密な意味では本研究の枠を越え出るが、本研究の成果を踏まえつつ、より広い視野に立って、現代世界における「宗教」的なるものの位置づけ、またあり方をめぐる学術的発言をいくつか行った。その大きな論点は以下となる。

まず、「神秘主義」という概念は、上に述べてきたように、十九世紀から二十世紀にかけて、世俗化が進行した欧米社会（日本を含む）において、それまで「宗教」（具体的にはキリスト教）が専一に担ってきた、この世の秩序を超えた領域との関わり一般を、伝統的なキリスト教神学の枠を越えて考えるための広い領域を指すために構築されたものだった。この領域は、二十世紀後半以降は、「神秘主義」という語がはらむある種の特殊性、希少性を取り除いて、誰ももが自由に探究してよい領域を指す言葉としての「スピリチュアリティ」に引き継がれていく動向が指摘できる。「スピリチュアリティ」は、「神秘主義」がいわば「民主化」された形態なのである（「スピリチュアリティを新たに活かす」、伊達聖伸・アブデナール・ビダール編『世俗の彼方のスピリチュアリティ - - フランスのムスリム哲学者との対話』東京大学出版会、137-151頁、2021年12月）。これと重なるかたちで、二十一世紀に入って内外で広く行われるようになった「死生学」も、従来の「宗教」や「哲学」の、現代世界のあり方や社会的ニーズを反映した重要な後継形態とみることができる（「現代世界における「宗教」のヴィジョン - - 死生学とのかかわりのなかで - - 』、『死生学年報 2020 - - 死生学の未来』2020年、29-47頁 2020年3月）。

こうした動向は、より広くは、西欧のキリスト教を範型とした「宗教」という概念自体、また近代のいわゆる講壇哲学を規準とする「哲学」といった、近代世界を形作ってきた基礎的語彙の有効性自体が問い直されている状況、「ポスト宗教」、「ポスト哲学」、「ポスト世俗」等と言われる時代状況に呼応している。こうした認識をもとに、近代以前の古代・中世世界においては「宗教」と「哲学」のかかわりは近代以降とは大きく異なっていたことを再認識し、そこに立ち戻って「宗教」や「哲学」の現代的あり方を新たに拓くことが求められていると展望できる（「哲学」と「宗教」の「はざま」 - - 宗教学の観点から - - 』、近刊予定）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 24
2. 論文標題 「哲学」と「宗教」の「はざま」 - 宗教学の観点から -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 新プラトン主義研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 32
2. 論文標題 十字架のヨハネ『光と愛の言葉』：翻訳と読解	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 清泉女子大学キリスト教文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 5
2. 論文標題 ルイス・デ・レオンにとっての「女性」の諸相 - 雅歌読解を中心に -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教父と相生	6. 最初と最後の頁 116-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 388号
2. 論文標題 カルメルの外のカルメル - 教会の外から見られたアピラの聖テレジアと十字架の聖ヨハネ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 カルメル - 今日の霊性	6. 最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 20
2. 論文標題 「十字架のヨハネの詩をどう読むか 上田閑照の「言葉」論を参照しつつ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東西宗教研究	6. 最初と最後の頁 39-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 94
2. 論文標題 スペイン神秘主義の読まれ方 - 思想形成の資源としての詩と体験 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宗教研究 (別冊)	6. 最初と最後の頁 90-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 -
2. 論文標題 現代世界における「宗教」のヴィジョン - - 死生学とのかかわりのなかで - -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 死生学年報 2020	6. 最初と最後の頁 29 - 47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 2020年1月号
2. 論文標題 神秘主義の系譜と可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 6 - 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 8
2. 論文標題 身心変容のものがたりとしての『霊の讃歌』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身心変容技法研究	6. 最初と最後の頁 131-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshio Tsuruoka	4. 巻 2
2. 論文標題 "Seek Yourself in Me": Teresa of Avila's "Feminist" Mysticism"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教父と相生	6. 最初と最後の頁 198-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計7件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Yoshio Tsuruoka
2. 発表標題 "How and Why I am interested in Raimon Panikkar": El neoplatonisme i la mistica cristiana: Una lectura des del Japo
3. 学会等名 Lectures Fons Raimon Panikkar, Universitat de Girona (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 鶴岡賀雄
2. 発表標題 「哲学」と「宗教」の「はざま」
3. 学会等名 新プラトン主義協会 (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 鶴岡賀雄
2. 発表標題 十字架のヨハネの詩をどう読むか 上田閑照の「言葉」論を参照しつつ
3. 学会等名 東西宗教交流学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鶴岡賀雄
2. 発表標題 スペイン神秘主義の読まれ方 - 思想形成の資源としての詩と体験 -
3. 学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鶴岡賀雄
2. 発表標題 中世キリスト教のイスラーム世界宣教 - ライムンドゥス・ルルス冒険
3. 学会等名 龍谷大学380周年記念シンポジウム「仏教・イスラーム・キリスト教の交流に向けて」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鶴岡賀雄
2. 発表標題 キリスト教における身心変容技法と靈的暴力
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshio TSURUOKA
2. 発表標題 "Seek Yourself in Me": Teresa of Avila's Feminist Mysticism
3. 学会等名 岡山大学文学部講演会・シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 鶴岡賀雄，他（佐野東生・久松英二（編））	4. 発行年 2024年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 キリスト教とイスラーム・対立から共生へ 神秘思想にみる聖人・悪魔観	

1. 著者名 鶴岡賀雄（森本一夫、他（編））	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 680
3. 書名 イスラームの内と外から - - 鎌田繁先生古稀記念論文集 - -	

1. 著者名 鶴岡賀雄、他（上智大学中世思想研究所編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 352
3. 書名 「原罪論」の形成と展開	

1. 著者名 鶴岡賀雄、他（伊達 聖伸、アブデヌール ビダール（編））	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 世俗の彼方のスピリチュアリティ	

1. 著者名 鶴岡賀雄、他（久保田浩、鶴岡賀雄、他（編））	4. 発行年 2020年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 571
3. 書名 越境する宗教史 下巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------